

ケベック学会西日本地区第1回研究会（ベルギー研究会共催）プログラム

開催日時：2016年2月13日（土）午後1時開会

会場：阪南大学あべのハルカスキャンパス（大阪市阿倍野区阿倍野筋1丁目1-43「あべのハルカス」23階オフィスフロア、TEL 06-6654-5570）

参加費：無料

研究会タイトル：「多言語社会ケベックとベルギー — その言語状況と舞台芸術」

日程および内容：

- 12：30 受付開始
- 13：00 開会挨拶 丹羽卓総合司会者（企画委員長）
- 13：05 第1部「ケベックとベルギーの言語状況」
司会：真田桂子（阪南大学）
発表：大石太郎（関西学院大学）
「ケベックのアングロフォン—現状と今後の展望—」
石部尚登（日本大学）
「ベルギーの言語としてのフランス語—ワロン運動における言語観から」
コメンテーター：岩本和子（神戸大学）
- 15：05 休憩
- 15：20 第2部「ケベックとベルギーの舞台芸術」
司会：岩本和子（神戸大学）
発表：高橋信良（千葉大学）
「ベルギーの現代舞台芸術—教育と情報が果たす役割」
藤井慎太郎（早稲田大学）
「ケベックの地域主義・文化政策・舞台芸術」
コメンテーター：真田桂子（阪南大学）
- 17：20 閉会挨拶：岩本和子ベルギー研究会会長
- 17：25 閉会 真田桂子実行委員長
- 18：00 懇親会（「なかの家」あべのハルカスダイニング 13F）

企画委員長：丹羽卓（金城学院大学）

実行委員長：真田桂子（阪南大学）

企画委員・実行委員：岩本和子（神戸大学）、大石太郎（関西学院大学）、真田桂子（阪南大学）、丹羽卓（金城学院大学）

研究発表概要

第1部 ケベックとベルギーの言語状況

「ケベックのアングロフォン—現状と今後の展望—」

大石 太郎（関西学院大学）

ケベックでは、フランス語のみが州の公用語とされた 1974 年以降、現在に至るまでフランス語一言語政策が強力に推進されてきた。そうした政治的状況などを背景に、1970 年代から 1980 年代にかけて相当数のアングロフォンがケベック州外に流出し、ケベック州人口に占めるアングロフォンの割合は低下した。従来、ケベックのアングロフォンにマイノリティ意識はなく研究の対象にもされてこなかったが、1980 年代から研究成果がみられるようになり、最近ではケベック州外のフランコフォンとともにカナダの公用語マイノリティとしてとらえられるようになってきている。本報告では、国勢調査に基づいてアングロフォンの人口をマルチスケールで分析するとともに、報告者がおもにモントリオール（モンレアール）で実施してきた現地調査に基づいて、ケベックのアングロフォンの現状を明らかにする。また、最近の研究動向をふまえて今後の展望にも言及するつもりである。

「ベルギーの言語としてのフランス語—ワロン運動における言語観から」

石部尚登（日本大学）

1830 年に独立を果たしたベルギーは、フランス語を唯一の公用語とする単一言語国家を志向した。領土、言語、国民の結び付きを重視する時代の要請に応えるこうした選択は、ワロン人とフラーンデレン人の違いを超えて選良層がフランス語を共有していたことで可能となった。

しかし、一般市民のことばに目を向ければ、フランス語は、フラーンデレン人はもとより、多くのワロン人のことばでもなかった。言語対立が先鋭化する 20 世紀初頭に至るまで、一般のワロン人たちはロマンス語系のワロン諸語を母語として維持し続けた。現在、これらのことばはフランス語とは異なる内発的な「言語」として公的に承認されている。

本報告では、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて大きな盛り上がりを見せたワロン運動を取り上げ、伝統言語としてのワロン諸語と公用語としてのフランス語の間でどのように折り合いをつけることで運動が展開されたのかを検討することで、ワロニー地域の歴史的なフランス語圏化の過程の一端を明らかにしたい。

第2部 ケベックとベルギーの舞台芸術

「ベルギーの現代舞台芸術—教育と情報が果たす役割」

高橋信良（千葉大学）

舞台芸術を再考し、その新たな可能性を模索するには、舞台芸術とは何か、その歴史と制作方法を理解せねばならない。そこで教育機関と網羅的情報が必要となってくるが、それはベルギーの現代舞台芸術にとっても例外ではない。教育機関としては、モーリス・ベジャールが設立したムードラを除けば、オランダ語圏には、王立演劇・映画・音響学院（RITCS）やパフォーミング・アーツ研究養成スタジオ（PARTS）が、フランス語圏には、視聴覚芸術院（IAD）や国立舞台芸術高等学院（INSAS）がある。そして情報は、それぞれの語圏において、フランデレン演劇研究所（VTI）と舞台芸術会館ラ・ベローヌ（La Bellone）に集約されている。本発表の目的は、これらの機関について、それぞれが設立された時代背景とその後の歩みを概観し、それぞれが果たしてきた役割と今後の可能性を見極めることにある。

「ケベックの地域主義・文化政策・舞台芸術」

藤井慎太郎（早稲田大学）

ケベックの現代舞台芸術は、ロベール・ルパージュ、ラララ・ヒューマン・ステップス、シルク・デュ・ソレイユなどの成功を通じて、1980年代に世界的に知られるようになって、その創造性の水準を維持したまま現在に至る。その背景には、1970年代に自らのアイデンティティを模索しながら一言い換えればフランス、英語圏カナダ、アメリカ合衆国の文化との距離を測りながら一生じた実験演劇の運動、および1961年に創設された州政府文化省（さらに1994年に文化省によって創設されたケベック州芸術人文評議会）によって主になされてきた、北米では例外的に手厚い芸術創造支援がある。さらにその背景にあるのは、言語対立を背景としたケベックのナショナリズム、分離独立運動の高まりであり、「静かな革命」であったといえよう。本発表では、地域主義の高揚、文化政策の整備、舞台芸術における創造性の三項の相関関係をより詳細に検討するとともに、今日のケベックの舞台芸術がどこに向かおうとしているのか、考察してみたい。